

はちがつよつかえいきょうかいしむ
8月8日営業開始に向けて

たかやまえいきょうかちょう
高山営業課長は、牛田町の安楽寺前にあつた合宿に住んでいたが、六日の朝
はやまであ
は早出に当たっていたので、早目に家を出て、白島の終点で電車に乗り、中央部
の座席に座っていた。電車が走り出してから間もなく、ちよつど泉邸（爆心か
でせきすわ
ら約千二百メートル）の手前のカーブに差しかつたところで被爆した。

いしゆん
一瞬、暗闇の中に追い出されたようであった。ガラスの破片で頭に切傷が
かお くび せなか
でき、顔や首や背中などに火傷を負っていた。電車から這い出して、暫くそこ
でしゃがんでいたが、出血がひどかつた。しかし、銀行のことが気になつたの
で、高山は這つよつにして支店を目指した。

ちやう
漸く紙屋町の交差点まで来て、袋町のほうを見ると、支店の建物が目に入
つたが、あたりはもう火の海で、それ以上近づくことができなかった。やむな
うした がつしゆく
く牛田の合宿へやつとの思いで帰ってみると、これまた無残にも倒壊していた。
たかやま
そこで高山は、しばらく牛田の山で、退避していたが、そのうちに漸く気力が
かひぶく
回復してきたので、負傷を押して再び銀行を目指した。

ひばくとらでしうし
被爆当日の八月六日、広島支店は午前十一時半頃まで孤立無援の状態にあつ
た。そこへ高山営業課長が、牛田から熱火の中をくぐり抜けて、支店に到着し
た。

ちやうで
丁度、己斐から無事到着した若松国庫課長と一緒に、玄関正面の消火をし
ふたり
たあと、二人は裏へ回って備員室へ行くと、そこに重傷の吉川支店長と中尾
ちやうめくへ
調査役が座っていた。

支店長は高山に対し、「近隣店への連絡と営業開始を考えよ」と命令し、若松には、「医者をさがしてくるように」と命じた。

二人が外へ出て、日赤病院の前を通りかかったとき、若い医者たちが一般の怪我人の治療をしていたので、漸くその中の一人に支店に来てもらうことができた。そのあと、高山は宇品の鉄道局へ行った。

電話は通じない。やむをえず宇品の暁部隊の司令部へ行って、顔見知りの出納官吏に日銀の他支店への通信を頼んだが、場合が場合だけに相手にしてくれない。

それでも、ねばって、司令官に頼むと、あまり執拗なので、やっと、「いったいどこへ、何を連絡すればよいのか、そこに書いて行け」といつてくれた。高山は副官から紙と鉛筆を借りて、本店、大阪、松山、松江、岡山、門司と、六か所への連絡事項を書いた。そして店に帰り、その旨を報告し、地下へ降りて、金庫がなんとか無事であることを確認したあと、営業開始のために他の金融機関と連絡をとろうと思ひ、再び外へ出た。

鷹野橋のところで、偶然勧銀の次長に会った。

「明日(あした)七日(ななか)から営業するから、出てきてほしい」「どこでやるんですか?」「どこでやるんですか?」

「うち(うち)日本銀行(にっぽんぎんこう)でやるほかない」「そんな無茶(むちゃ)を言(い)っても、この状態(じょうたい)では明日(あした)から営業(えいぎやう)なんか、とてもできないです」

しかし高山(たかやま)は、罹災(りさい)市民(しみん)のためにも、何とか早く営業(えいぎやう)しなければと、気があ

せっていた。

結局一日だけ延ばして、営業開始は翌々日の八日からとすることとなったが、これほどの罹災状況と焼け野原の真只中で早速、本行が営業を開始したことは、それ自体、大へんなことであった。